「あめの下にもりてきこゆることもあり」

――『今物語』に語られた日本中世の僧侶の暮らし[1]――

那　須　英　勝

はじめに

鎌倉中期に，歌人で似絵作者としても高名であった藤原信実（1177？-1265？）が編纂したと伝えられる『今物語[2]』は，その書名に示されているように，著者の在世当時に公家の間で知られていた「語り草」を集めた説話集である。本書の著者と考えられる信実は，晩年に出家して寂西となるが，歌人として活躍している当時も，都の仏教界との関係は大変深かったようで，『今物語』には日本中世の僧侶の暮らしぶりを伝える逸話が数多く記録されており，本書は中世の仏教文化を研究するうえでも大変貴重な文献であるといえよう[3]。

なお『今物語』に収載されている語り草は，あくまで説話として記されているので，まったく史実に基づいていないというわけではないのだが，中世仏教の歴史的研究のための第一次資料ではない。しかし，本書で語られている個々のケースが全く史実に反するというものでもなく，また信実のような鎌倉中期を代表する一流の文人貴族の目を通して，当時の公家社会の中で，僧侶の暮らしはどのように見られていたのかが知られる点では，本書は非常に重要な資料であると言ってもよいであろう。

従来，寺社勢力と武家との交わりを中心に検討されてきた中世仏教史の研究であるが，『今物語』では，公家の視線から僧侶の暮らしが包み隠さず語られており，本書で語られる僧侶像は，私たちに，中世の仏教文化をはばひろく理解するために必要な，もう一つの視点を提供しているのではないだろうか。

これまで『今物語』については，主として本書の和歌物語としての性格や，収録されている説話の史的考証などを中心に多数の研究が発表されているが，中世の貴族社会に生きた人々が，その当時の僧侶というものをどのように見ていたのかという視点からの考察は，あまりなされてこなかったようである。本

論文では，『今物語』の中から，文人貴族である藤原信実が見聞した当時の仏教僧の姿が記述されている箇所に焦点をあて，説話のスタイルで語られる日本中世の僧侶の暮らしについて考察してみた。

本論文では，まず公家社会に生きた藤原信実とその一族の事績を，特に法然門流との関わりという視点を中心に概観し，続いて『今物語』に登場する僧尼の暮らしを（1）愛欲と名利；（2）世俗からの離脱，（3）聖と俗をつなぐ仏道としての和歌づくり，の3つの視点から，本書の説話の内容を紹介しつつ検討していくことにする。

藤原信実と法然門流との交流について

藤原信実と当時の都の仏教界の関係について，特に信実とその父と子の事績も含めて，まず概観しておきたい(4)。信実の家系は，歌人・画家の家として知られているが，仏教界との関係は，特に法然門流と近い関係があったことが知られている。まず信実の父，藤原隆信（1142-1205）は，法然（1133-1212）に深く帰依したことが知られており，その筆にかかる「隆信の御影」は法然の肖像画として最も有名なものである。また，信実の長男である藤原為継（1206-1265）は，出家して専阿弥陀仏と名乗り，浄土真宗の開祖親鸞の肖像画である「鏡の御影」の作者と考えられている。このように，信実の一族は，都では修する事を停止されることになった「専修念仏」を説く法然とその門下と，念仏停止の前後に渡って，関係が深かったことが予想される。

以下，隆信，信実，為継，父子三代の事績について簡単に紹介すると，まず信実の父，藤原隆信は，藤原定家（1162-1241）の異父兄であり，歌人としては，後白河院の時代の『千載和歌集』（1188）や後鳥羽上皇の時代の『新古今和歌集』（1216）にも入撰している。画家としての隆信は，写実的・記録的な肖像画として鎌倉・南北朝期に流行した「似絵（にせえ）」のジャンルを確立した人物であると考えられている。特に，後白河法皇（1127-1192）の命で描いたとされ，知恩院所蔵の「隆信の御影」として知られる法然の肖像は特に有名である。その後，法然を師として，仏教に深く帰依し，のちに法然を戒師として出家（1202）し，戒心と名乗っている。

つぎに，本論文で取り上げる『今物語』の作者とされる藤原信実（1177？-1265？）も，父隆信とおなじく，歌人として，また似絵画家として活躍したことが知られている。歌人としての信実は『新古今和歌集』の撰にこそもれるが，その後，後堀川天皇時代の『新勅撰和歌集』（1235）以下，勅撰集に122首入撰

し，1500首以上の和歌を残している。画家としての信実は，後鳥羽院（1180-1239）の肖像画と「三十六歌仙絵巻」が最も有名である。信実は72歳の時に（1248）に出家し，寂西と名乗った。なお信実が，法名に「寂」の字を用いたのは，藤原為忠の子で『今鏡』の作者ともされる，祖父の寂超（藤原為経：生没年不詳）と，その兄弟の寂念（藤原為業：生没年不詳）・寂然（藤原頼業：生没年不詳）の縁者であったことによるものと推される。信実は当時としても非常に長命で，90歳前後で没したようだが，その最後については伝えられていない。

また，信実の子である藤原為継（1206-1265）も，家の業を継いで，似絵画家であったが，また歌人としても知られる人物である。歌人としての業績としては，後嵯峨院の時代の『続後撰和歌集』（1248）に入撰している。為継はのちに出家し念仏僧となり，専阿弥陀仏と名乗ったとも伝えられる。浄土真宗の伝統では，開祖親鸞（1173-1262）の70代の姿を写したとされる「鏡の御影」の作者と伝えられていたようだ。この御影は，本願寺第三世の覚如（1271-1351）によって表装されたが，その裏書きに「専阿弥陀仏　信実朝臣息なり，号袴殿[5]」と記されている。また，この専阿弥陀仏は，覚如の著した親鸞伝である『御伝鈔』第八段「入西鑑察」で，親鸞の肖像を写したとされる禅定法橋と同一人物であるとも推されている[6]。

このように信実の父と子については，仏教に深く帰依し，特に法然門下との関係が深かったことが知られている。しかし，これに対して信実については，晩年に出家するまでは，それほど熱心に仏教に帰依していた様子はうかがわれない。ただし，『今物語』には，法然に師事した高野の蓮華谷明遍（空阿弥陀仏 1142-1224）に関する逸話が含まれること[7]，また絵師としては専修念仏停止の院宣を出した後鳥羽院が，承久の乱（1221）で失脚した際に，院の母のためにその肖像画を描いたことも知られている。これらの点からしても，信実とその一族は，当時，都に出入りしていた僧侶たち，特に法然門流の僧侶との交流があったことが知られる[8]。なお後鳥羽院は，承久の乱に敗れ，隠岐の島に流罪になった後，浄土教に帰依し『無常講式』を作したとされるが[9]，信実の「三十六歌仙絵巻」は隠岐の後鳥羽院に献上したものとされることからも，陰に陽に公家社会の動静にも通じていたようである[10]。

このように藤原信実とその一族は，専修念仏停止の前後も一貫して，法然門流の僧侶との交流があっただけでなく，建永二年（1207）に専修念仏停止を決した後鳥羽院とも関わっていることからも，法然門流をめぐって当時の公家と

僧侶との間で繰り広げられた人間模様は，藤原信実とその一族だけを取り上げてみても，義理を重んじる武家社会とはかなり異なった倫理観をもって動いていることが知られて大変興味深い。[11]

愛欲の都に生きる僧侶たち

『今物語』の作者と考えられている藤原信実は，その父子とは異なり，文人貴族として，仏教とは一線を画した生き方をしていたようで，僧侶に対してもかなりドライな見方をしていたようだ。そのような僧侶観を反映してか，『今物語』に登場する僧侶の暮らしについての記述には，愛欲の中で暮らす僧侶の姿が遠慮なく描かれているものが多くみられる。

例えば，第十二話（蘆手書[12]）は，慈鎮和尚（慈円，1155-1225）が天王寺の別当だった頃のこととして，お付きの稚児の一人に焦がれた天王寺のある女性が，拝道の儀式の行列にいた見目麗しい稚児に，当時の習いに従って紅梅の檀紙に葦手書き（絵文字）で書かれた恋文を送った話が載せられている。しかし，せっかく送られてきた恋文が葦手書きで書かれていたので，恋文を送られた稚児だけでなく，学のある僧侶を含めだれも読むことができず，一同面目を失いそうになったが，一行のうちのあるものが機転を利かして，その葦手の絵文字を下絵とみなして，そこに

おぼつかな　なにはにかける言の葉ぞ　都に住めば知らぬ葦手を[13]

という歌を書き付けて，なんとかその場を凌いだという話である。

これが史実であるかどうかはさておき，このような話が語られる背景には，当時の僧侶，稚児，そしてそれを取り巻く女性たちの間に存在した微妙に緊張した人間関係がうかがわれ，また本話に記されているような状況が発生することは，当時の公家と僧侶の間で，十分にあり得ることと受け入れられていたのであろう[14]。またこの話からは，厳しい戒律を通して隔てられているはずの僧侶と俗人の住む世界の間が，「和歌」という共通の文化によって取り持たれていることも知られて興味深い。

また第二十一話（聖の家）には，平安中期の僧侶である東山の雲居寺の瞻西上人（？-1127）の次のような話が取り上げられている。

京極太政大臣と聞えける人，いまだ位浅かりけるほどに，雲居寺のほどを過ぎられけるに，瞻西上人の家を葺きけるをみて，雑色を使ひにて，

聖の屋をば目隠しに葺け

と言はせて，車を速く遣らせけるに，雑色のはしりかへる後ろに，小法師

を走らせて，

あめの下にもりてきこゆることもあり

と言はせたりける，そのほどのはやさ，けしからざりけり[15]。

本話に登場する瞻西は，歌人でもありまた僧侶としては説経に巧みで，特に女性の受戒や供養を熱心に行った人物であることでも知られている。また瞻西上人が再興した雲居寺は女性の駆け込み寺的な性格を持っていたようだ。本話では，京極太政大臣（藤原宗輔，1077-1162）が，東山の雲居寺の前を通りがかりに，そこに女性を住まわせていた瞻西にたいして「聖の屋をば目隠し（女・妻［め］隠し）にふけ」という下の句を従者に言わせてからかったところ，瞻西は，すぐさま小法師を走らせて「あめの下にもりてきこゆることもあり」，つまり「雨漏りがして音が聞こえることもある（天下に漏れ聞こえることもある）」と洒落た上の句を素早くつけて答えた，その機転の速さをほめた話である。

もちろん瞻西のような僧侶は，戒律の建前からすると正式には妻帯していないはずであり，ましてや聖の住む僧院の一つ屋根の下に住まわせるということはないはずであるが，このような話が，中世の公家の間で面白く語りつがれていることからも，それが瞻西のつけた上の句のごとく「天下に漏れ聞こえる」ほどに，信実の生きた公家社会においては黙認されていたことが知られる。都に住まう僧侶達は，寺に女性の出入りがあることは一応隠そうと「目隠し」（女・妻［め］隠し）はするが，自分たちの女性との関わりが世間に漏れ聞こえても，世間的に対して，ことさら女性との関係を否定するような必要のなかったことが本話からうかがわれるのである[16]。

名利に迷う僧侶たち

信実は『今物語』の中で，都の僧侶たちが世俗の「名利」を求めて生きている姿を，公家の目から面白く描いた話も集めている。例えば，第四十九話（ひきがえる）では，僧位の昇進を生きがいとした僧侶を取り上げている。

小侍従が子に，法橋実賢といふ者ありけり。いかなりける事にか，世の人，これを，ひきがへるといふ名をつけたりける。法眼が望み申して，

法の橋の下に年経るひきがへる　今ひとあがり飛び上がらばや

と申したりければ，やがてなされにけり[17]。

この話ではいかなる理由か「ひきがえる」という大変気の毒なあだ名を付けられた僧が，そこを開き直って，僧位の昇進という自己の願望をかなえるために「ひきがえる」だからこそ「今ひとあがり　飛び上がらばや」という気持ちを

込めた歌を詠んだところ，みごとそれが実現するという話である。

この説話の主題は「歌に人の望みを叶える力がある」という歌の徳を説くところにある。しかし，その例としてあげられているのは，僧位の昇進という世俗的な名利の追求を歌に託した僧侶であるところが興味深い。実賢のようにあまり眉目秀麗ではない場合には，愛欲の誘惑に沈没する恐れは少なかったかもしれない。しかしその反動であろうか，名利に迷ってしまう僧侶も少なくなかったと想像される。

また世俗の「名利」を求めることは，僧位の昇進だけではない。例えば第三十四話（木片の名号）では，比叡山の横川で小法師が，柿の木の木切れに「南無阿弥陀仏」という文字に読める黒ずみのあるものを見つけた話が記されている。本話では，この木切れを見つけた小法師の師僧は，大変不思議に思い，それを上司の僧侶に見せてしまうところから，次のように話が展開する。

> 不思議などもいふはかりなくて，横川の長吏々法印といひける人に見せたりければ，上西門院，をりふしみやしろに御籠りありけるに，持ちてまゐりて，御覧ぜさせければ，とらせ給ひて，後白河院にまゐらせさせ給ひてけり。蓮華王院の宝蔵に納まりけるを，「我が所にこそ置くべけれ」とて，いきどほり申しけるとなん[18]。

このように，小法師が見つけた木切れは，次に横川を管理する上級の僧侶の手に渡り，それがついには後白河院（1127-1192）に献上されることになったのである。しかし，本話のまとめは，その木切れが「蓮華王院の宝蔵」に収まったことの有難さを説くための霊験譚ではなく，木切れのようなものでも，自らの名利のためになんでも利用する僧侶の有様を描き，最後にどう考えても霊験などありそうにもない，ただの木切れであるにもかかわらず，それを横取りされた僧侶が「我が所にこそ置くべけれ」と憤ったことのおかしさを伝えるところにある。

この話には，あやしげな霊験を好む後白河院を利用して，僧侶としての階級の上下を問わず，木切れでもなんでも利用できるものは何でも使って，世俗の名誉を得ることを求めた僧侶の姿が描かれている。また僧侶がこのような怪しげな霊験物を失って「我が所にこそ置くべけれ」と悔しがるといったところには，僧侶が自分の生活を支える為に苦労をしている姿も読み取れる。

名利を追う僧侶がさらに世俗社会に踏み込めば，政治と深く関わることになる。このような例を記しているのが『今物語』第四十八話（文覚の歌）である。本話に登場する文覚（1139？-1204[19]）は，神護寺を再興し，東寺や高野大塔の

修造なども手掛け，最初の配流地である伊豆で知遇を得た源頼朝や後白河院の外護もあり力を持っていたが，頼朝と後白河院の没後は影響力を失い，六〇歳を過ぎた頃（1199年）に政争に巻き込まれた結果，佐渡に流罪となるが，建仁二年（1202）に許され，都に帰還した。本話は，二度目の配流先である佐渡からようやく帰京した時に，知人と歌を取り交わしたことを記した話である。

そこで，文覚は「やんごとなき歌詠み」への返歌に

うれしさも都に出でしそはいかに　今はかへりてかかるおいせを[20]

と，自らの死を覚悟して向かった流刑地から老体（老瀬）にもかかわらず，無事に都に帰還できた喜びを詠んでいる。しかし，元久元年（1204）には，後鳥羽院への謀反の嫌疑により，対馬に流罪となり，配流先にたどり着く前に，鎮西で没したようである。そういう事情もあってか，信実は，この文覚の帰還の喜びの歌に続けて，

この上人の歌に，

世の中に地頭盗人なかりせば　人の心はのどけからまし

と詠みて，「我が身は業平にまさりたり。春の心はのどけからましといへる，何条，春に心のあるべきぞ」と言ひけり[21]。

とこの話を締めくくっている。

歌の才能についてはさておき，文覚のように政治の世界にその活動の中心を置く僧侶が「地頭盗人なかりせば」というところからは，当時の寺院が，独立した荘園領主として経済活動も活発に行い，また世間もそれを認めていたことが知られる。ただし行き過ぎた場合は，文覚のように，政治に干渉した罪により，俗人と同様に生涯に三度も流罪という厳しい処罰を受けることもあったようだ。

この「地頭盗人なかりせば」の歌は，もちろん在原業平の詠んだ「世の中にたえて櫻の　なかりせば　春の心は　のどけからまし」(『古今和歌集』春上・53)」のパロディであるが，本話で信実は，文覚を名利を求めて政治に取り憑かれ「人の心」しか見えなくなり，「何条，春に心のあるべきぞ」と「春の心」を愛でる気持ちも枯れてしまった悲しき僧侶として描いているのである[22]。

世俗を離れて生きる僧尼

以上のように，『今物語』では，俗世とかわらず「愛欲」に交わり，「名利」を求めて生きている都の僧侶たちの姿が，信実によって，公家の視線からありありと描かれている。しかし，その一方で，信実は，愛欲・名利への思いを断

ち切り，世俗を離れて生きることが，僧侶としての本来のあるべき姿だと語る話も記している。

例えば，第二十三話（みそのの尼）と第二十四話（亀井の尼）の二話は続けて，ともに男性との愛に自ら見切りを付けて，尼僧になった女性の話である。お相手の男性は，みそのの尼は摂政の藤原基房（1145-1230），亀井の尼は帝で後鳥羽院らしいが，上流貴族であれ帝であれ，この二人の女性は自分の気持ちをそれぞれ下記の歌に託して，さっぱりと縁をきったと記されている。

いまさらにふたたび物をおもへとや　いつもかはらぬ同じうき身に[23]

（いまさら再び恋に思い悩めというのですか，恋心があろうとなかろうと，いずれにせよ，憂き世に生きる，憂き身にかわりはないものです。[第二十三話]）

なかなかにとはぬも人のうれしきは　うき世をいとふたよりなりけり[24]

（なかなか訪ねて来ていただけないのも嬉しいものです。そのおかげで，この憂き世である俗世を厭うきっかけになりますから。[二十四話]）

信実は，この二人について，第二十四話の最後に「（亀井の尼と）みそのの尼といづれか深からん[25]」とその潔さをたたえている。

また第三十六話（利剣即是弥陀号）には，鎌倉の武士としての暮らしを捨てて出家し，高野山の蓮華谷で修行に励む僧侶が，鎌倉に残して来た女房への断ち切れぬ思いによって現れたと思われる女性の生霊を，同信の修行者たちがなんとか力を合わせて調伏しようとする話である。本話では，この僧にとりついて離れない生霊に手を焼かされたが，法然の教えを受けた高僧である空阿弥陀仏（蓮華谷明遍，1142-1224）の法力によってついには調伏されたことが次のように記されている。

…蓮華谷の聖三四十人ばかりめぐり居て，この入道をなかに据ゑて，念仏を責め伏せて申したるに，入道も同じく申しけるが，空阿弥陀仏の秘蔵の本尊の，帳に入りたるがおはしましける，そのかたをつくづくとまもりて，おそろしげに思ひて，わなわなとふるひければ，空阿弥陀仏，よりて，「などおそろしげには思ひたるぞ」と問へば，「その御本尊の御前に，かの女房がまうで来て，我を世にうらめしげに見て候ふが，などやらん，あまりにおそろしくと」申しければ，その時，空阿弥陀仏，「門門不同八万四，為滅无明果業因，利剣即是弥陀号，一声称念罪皆除」と，たかく誦せられたりければ，この女の顔の，中より二つにわれて，散るやうに見えて，

失せにけり。[26]

しかし，かくも執拗に蓮華谷に生霊としてあらわれたはずの鎌倉にいた女房の方はというと，本話の最後にあるように，

本体の女は，つやつやさる事なくて，もとのやうに鎌倉にありとぞ聞こえし。天魔のしわざか，また，女の恋しと思ひけるがゆゑにか，いとふしぎなり。[27]

と，高野の修行僧の苦悩とは裏腹に，何事もなく暮らしていたということであるので，この場合は，生霊ではなくて出家しても男になお残る愛欲に対する未練の強さが作り出した幻影かもしれない。しかし，この話では，妻も家族も捨てて，遁世者として世俗を離れることを目的として共に生きる修行者たちの生き方は，信実の目には，愛欲と名利にまみれた都の僧侶と比較して，積極的な姿として描かれているのである。

なお，本話で明遍が調伏の時にもちいた誦文は，健保５年（1217）仁和寺の宝金剛院にて新しく発見されたといわれる善導の『般舟讃』の「門門不同八万四，為滅無明果業因，利剣即是弥陀号，一声称念罪皆除（門々不同にして八万四なるは，無明と果と業因とを滅せんがためなり，利剣はすなはちこれ弥陀の号なり，一声称念すれば罪みな除こる）[28]」の文である。ここからも『今物語』の著者とされる信実が，法然門下の僧侶たちとなんらかの交流があったであろうことは想像に難くない。

次に，第四十七話（松島の上人）では，世俗を離れて生きる遁世者として名利を離れた暮らしをする僧侶の姿を次のように語っている。

松島の上人といふ人ありけり。修行者の，会はむとて行きたりけるに，幽玄なる僧の出で会ひたりければ，いと思はずにおぼえて，帰り入りたりける跡に，又ありける僧に，「あれは誰にておはしますにか」と尋ねければ，「あれこそ聖の御房よ」と言ひけるに，「たふとげになむどやおはしますらむとこそ思ひつれ」と言ふを，聖，物越しに聞きて，詠める歌，

紫の雲まつ島に住めばこそ　空ひじりとも人の言ふらめ[29]

と詠めりけり。

この聖のもとへ，肥後の右衛門入道といひける者，行きて，「かくておはしますほど，何事か候ふ」と尋ねければ，「させることも侍らず。法花経など覚え奉りて，寝たる折り折り，この島の松の葉ごとに，金色の光の見えて，かかやく事などぞ侍る」と言はれける，いとめでたかりけり。[30]

この松島の上人とは宮城県の松島の霊場に住した高徳の僧として知られる見仏

上人（伝未詳）だと推定されている[31]。本話では，この高徳の僧と評判のある松島の上人を遠路訪ねていった修行者が，そのあまり見すぼらしい格好を見てがっかりしたというのである。しかしそれを物越しに聞いていた松島の上人は，自らのことを「空聖（そらひじり）」つまり「えせ聖人」とした歌をさらりと詠み，さらに霊験を得ているにもかかわらず，それを「させることも侍らず」と自らの徳をひけらかすことのなかったことを記し，実際は外見とは裏腹に高徳の聖僧であったことを伝えている。

この第四十七話は，先に紹介した前節で紹介した愛欲・名利にまみれた僧侶たちの話とは対照的に，世俗を離れることを仏道に求め，それを実践していた修行者がいたことを記した説話である。このように『今物語』では，名誉と利益を求めて，立派な法衣に身をつつんで外面のみ尊げな姿をすることに憧れる都の僧に対する批判として，松島の上人のように，身なりや世俗の評判を一向に気にせず奢らず，ただの仏道修行者として生きることを僧侶のあるべき姿として讃える説話も収録されているのである。

このように『今物語』の作者の周辺には，愛欲・名利の巷で俗人と変わらぬ姿で生きる都の僧侶がいる一方で，世俗を離れた場所に置いて仏道を歩む修行者の伝統もまったく失われてしまっていた訳ではなく，またそれが信実のような文人貴族の間でも高い評価をうけていたことも知られるのである。

和歌の道に生きる僧たち

では，愛欲・名利の巷である京の都には，信実の理想とするような僧侶はいなかったのであろうか。『今物語』では，信実がイメージする，都に住む「よき僧侶」の姿は，歌心をもった無名の僧として示されている。

例えば，下記の第十六話（梅の花笠）には，梅の花笠をつけ笑い者になっていた僧が登場する。

> ある者，所の前を，春のころ，修行者の不思議なるが通りけるが，檜笠に梅の花を一枝さしたりけるを，児ども，法師など，あまたありけるが，よにをかしげに思ひて，ある児の，「梅の花笠着たる御房」と言ひて笑ひたりければ，この修行者，立ち返りて，袖をかき合はせて，ゑみゑみと笑ひて，
>
> 「みの憂さの隠れざりける物ゆゑに　梅の花笠着たる御房
>
> と仰せられ候やらん」と言ひたりければ，この者ども「こはいかに」と，思はずに思ひて，言ひ遣りたる方もなくてぞありける。さうなく人を笑ふ

こと，あるべくもなき事にや[32]。

外見は貧しい流れ者であり，世間の笑い者になっている僧が，見事な歌を詠んでみせて，面目を一新させる話であり，信実をして「さうなく人を笑ふこと，あるべくもなきことにや」と言わしめている。

また，第十七話（花の白河）では，連歌の名人たちのやり取りに聞き入っているボロをまとった乞食僧が，「括りもとかず足もぬらさず」という句に，苦もなくさらりと「名にしおふ花の白川わたるには」とつけて人々を驚かせ，名も名乗らずに立ち去ったという話が記されている。また本話の最後には，本話の後日談として，

後に，このこと京極中納言［藤原定家］，聞き給ひて，「いかなる者にかと，返す返すゆかしくこそ。いかさまにてもただ者にてはよもあらじ。当世は，これほどの句など付くる人はありがたし。あはれ，歌よみの名人たちは，ぞくかうかきたりけるものかな。世の中のやうに恐ろしき物あらじ。よきもあしきも，人をあなどること，あるまじき事」とぞ言はれける[33]。

藤原定家を登場させて，定家の口から「よきもあしきも，人を侮あなどること，あるまじきこと」と戒めの言葉を言わしめている。

この二話はどちらも，無名でみすぼらしいすがたに身をやつした僧が，和歌に秀でた文人貴族よりも優れた歌心を持っていたというストーリーである。もともと，和歌などを読むことは，狂言綺語をあやつることとして仏道修行者は避けるべきであると考えられていたが，このような説話では，当時の僧侶には，たとえ無名であっても相当程度の高い和歌修行をしていた者がいたこと，また信実のような文人貴族の間では，そのような和歌の素養のある僧侶が高く評価されていることが知られる[34]。

最後に，信実の理想とする僧侶とその都での暮らしの理想と現実を語ったものとして，第四十五話（花に物思ふ）を見ておきたい。この話は，鳥羽院の御幸を前にして，法勝寺の庭に美しく散り敷く花をめでるこころのある下級の僧の詠んだ和歌のすばらしさと，その意を解せず花を片付けなかったことを罵る高位の僧の浅ましさが対照的に語られている。

鳥羽院の御時，花のさかりに，法勝寺へ御幸ならむとしけるに，執行なりける人，見てとくまゐりけるに，庭の上に，所もなく花散りしきたりけるを，「あさましき事なり。ただ今御幸のならんずるに，今まで庭を掃かせざりける」と叱り，腹立ちて，公文の従儀師を召して，「今までいかに掃除をばせざりけるぞ。不思議なり」と言ひければ，ついひざまづきて，

散るもうし散りしく庭もはかまうし　花に物思ふ春のとのもり[35]

と申して，「こや，御房が掃き侍らぬに」など言ひければ「ははがつび」といひて，なお叱りけり[36]。

下級僧の詠んだ美しい和歌に対して，寺の最高責任者である執行が吐いた「ははがつび[37]」という耳を覆いたくなるような猥雑なことばとの対比が興味深い。ここにも和歌のこころ，風流を愛でるこころをもつものこそが，たとえ高位の僧には理解されずとも，道を知るものであるという理解を示しているようである[38]。

おわりに

以上，藤原信実の編による『今物語』に語られる日本中世の僧侶の暮らしを紹介してみた。中世の都に生きる僧侶は愛欲と名利にまみれ，俗人よりも俗っぽい姿を示す者で溢れている様子がうかがわれるが，その一方で，都を離れて，世俗を超えた仏道修行に励む僧侶の存在とそれに対する高い評価もあったのである。また信実のような文人貴族の間では，鎮護国家のために働く官僚主義的な僧侶よりは，歌心をもちつつ世俗に生きる個人の願いをかなえる僧侶への世間の期待が高まっていたことも読み取れる。都に住む僧侶の立場からすれば，仏道と世間道とのバランスをとることは難しかったようであり，そこでは僧と俗を結ぶ架け橋として，世間道と仏道との対話のための一つの方便として，和歌という文芸の素養を持つことが重要であったことも『今物語』に語られる僧侶の姿から読み取ることができる[39]。

もちろん『今物語』は，信実が生きていた当時の「語り草」を伝えたもので，その語り口には信実という都に住む公家のバイアスがかかっている。また登場人物等には歴史的に実在した人物であるものが多いが，いかに歴史的な考証を加えても，本書は「説話」のスタイルで記されているので，厳密な意味での歴史的研究のための資料ではない。しかし，信実のように，歌人で画家として知られた，鎌倉中期の一流の文人貴族が，その当時の僧侶の暮らしをどのように見ていたかが知られる点では，他に類を見ない貴重な文献であると言ってもよいであろう。

また，信実は，法然門流の中で，浄土真宗の開祖となった親鸞（1173-1262）とほぼ同時代に生きた人物であり，この『今物語』が著された時期（1240年頃より以降の成立）は，親鸞が関東から帰洛したと考えられる頃（貞永元年，1232年頃）でもある。また親鸞の「鏡の御影」の作者として知られる，専阿弥陀仏

（藤原為継）が，信実の長男であったことが事実であるとすると，信実自身も親鸞と交流があった可能性も捨てきれないが，たとえ直接の関係はないにせよ，親鸞と同時代を生きた人物がとらえた中世社会に生きる僧侶の暮らしを記した『今物語』は，自らの僧侶としての生活については，ほとんど語ることがなかった親鸞の思想の成立背景を考える際にも参照すべき貴重な参考文献となりうるのではないだろうか。

注

⑴　本論文は2011年３月にカリフォルニア大学バークレー校にて開催された第２回龍谷大学国際シンポジウムでの発表「藤原信実編『今物語』に語られる日本中世の僧侶の暮らし」の原稿をもとにして執筆したものである。このシンポジウムを企画され，発表の機会を与えていただいた龍谷大学文学部日本語日本文学科，元教授の日下幸男先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

⑵　『今物語』の作者と成立については，三木紀人による『今物語』の解題「『今物語』と藤原信実について」(337-361頁）および，久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』の「解説」(29-76頁)を参照。作者については，現在，藤原信実であることを疑う説はない。また本書の成立時期については，1240年頃（信実60代中頃の）がその下限であると考えられている（三木紀人「『今物語』と藤原信実について」338頁)。

⑶　本論文の『今物語』の本文と注釈は，三木紀人全訳注『今物語』(講談社学術文庫，1998年）を主としているが，久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』(三弥井書店，改訂版1996年）も適宜参照した。

⑷　隆信・信実・為継三代の事績の概要については，主として，三木紀人「『今物語』と藤原信実について」(337-361頁）および，久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』の「解説」(29-76頁）を参照した。また信実・為継についての，詳しい年譜考証による事績は井上宗雄の「藤原信実とその子孫たち－法性寺家の人々－」『鎌倉時代歌人伝の研究』，風間書店（1997年）を参照されたい。

⑸　『親鸞聖人絵像・絵伝・木像』，『真宗重宝聚英』 第四巻，２頁。

⑹　『親鸞聖人傳繪（御傳鈔)』，『浄土真宗聖典全書』四・相伝篇上，88-91頁。

⑺　『今物語』第三十六話参照。

⑻　信実一族と法然門流との交流については，増渕勝一「『今物語』の作者と成立年代」『平安朝文学成立の研究　散文編』(笠間書店1982年)，319頁などでも指摘されているが，信実の姉妹との関係，特に連歌禅尼の信仰との関係などからもさらに検討する必要があるだろう。なお久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』の「解説」(34頁)にも指摘されているように，嘉禄の法難で隆寛・幸西とともに流罪に処された法然門下の空阿弥陀仏（空阿：1155-1228）と

信実は，法然画像を描くことを依頼されるなど，お互いに近い関係でもあったようだが（『法然上人行状絵図』第四十八巻），本書の第三十六話に登場する空阿弥陀仏（高野の明遍）とは別人である。

(9) 『無常講式』については，花野憲道・小林芳規「仁和寺蔵後鳥羽天皇御作無常講式影印・翻刻並びに解説」『鎌倉時代語研究』11（1988年），303-334頁参照。

(10) 絵師としての信実の活動については，米倉迪夫「藤原信実考」『美術研究』305号（1977年）等を参照。

(11) 本論文の主題とは直接関係する問題ではないが，例えば，平雅之氏等が『親鸞とその時代』（法蔵館，2001年）などで指摘されているように，聖覚はたしかに史料の上では嘉禄の法難に関わっていたとされる。しかしそれをもって聖覚が専修念仏弾圧を主導した人物の一人であるとするという結論については，当時の公家社会と僧侶たちの間に存在していた緊密な血族関係や交友関係なども含めて，再検討する余地は十分にあるだろう。

(12) 以下『今物語』の各話の題目は三木紀人全訳注『今物語』に依っている。

(13) この歌の大意は「都に住んでいるもので＜難波＞の葦手書きは知らないので，＜なに＞と書いてあるのかわかりません」というのであろう。ここでは「難波」は「何は」とかけてあり，また「葦」は難波の名物として知られている。以下，本文引用の『今物語』の和歌の解釈については，三木紀人全訳注『今物語』，久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』の注などを参照した。

(14) 石田瑞麿『女犯　聖の性』筑摩書房（1995年），松尾剛次『破戒と男色の仏教史』平凡社新書（2008年）などを参照。

(15) 三木紀人全訳注『今物語』143頁。

(16) 信実の生きた時代によく知られたこのようなケースとしては，八条院高倉（1176頃-1250頃）の例があげられる。高倉局は，聖覚法印の父である安居院超憲の娘で，母は不明とされているが，秘匿されてはいたものの，二条天皇の后であった高松院と噂されていたようである。しかし信実の時代の公家の間でのゴシップの対象であった高倉局だが，近年の研究ではその母が高松院であるという説はおそらく史実であっただろうと考えられている。田中貴子「法華寺の八条院高倉―来迎寺文書から―」『外法と愛法の中世』平凡社（2006年）193-218頁など参照。

(17) 三木紀人全訳注『今物語』318頁。

(18) 三木紀人全訳注『今物語』222-223頁。横川の長吏々法印の名は不明。前掲書の注等には，藤原仲実息円良がこれに該当するとある。

(19) 文覚の事績については，山田昭全『文覚』吉川弘文館（2010年），および山田昭全『文覚・上覚・明恵』山田昭全著作集第五巻，おうふう（2014年），11-112頁を参照。

(20) 三木紀人全訳注『今物語』311頁。

(21) 三木紀人全訳注『今物語』311-312頁。

(22) 山田昭全は，歴史学者の立場から『今物語』の第四十八話に採録されたこの逸話をとりあげ，それは「信隆や信実の残した似絵のごとく，文覚の晩年の実像を

生き生きと彷彿させる」優れた「歴史資料といわなくてはいけない」という評価をしていることも興味深い，(山田昭全『文覚』，149-154頁)。

(23) 三木紀人全訳注『今物語』154頁。

(24) 三木紀人全訳注『今物語』163頁。

(25) 三木紀人全訳注『今物語』164頁。

(26) 三木紀人全訳注『今物語』236頁。

(27) 三木紀人全訳注『今物語』237頁。

(28) 大正蔵47巻，448c。

(29) この歌の大意は「紫の雲を待ってここ松島にすんでいるのであるから，人がわたしのことを空聖［偽りの聖人］と呼ぶのでしょうね」。「紫の雲」は臨終来迎の聖衆の紫雲。「まつ島」は，松島と臨終を待つことをかけている。また「空」は雲の縁語で，「空聖（そらひじり）」は「えせ聖人」の意。

(30) 三木紀人全訳注『今物語』304頁。

(31) 三木紀人全訳注『今物語』304頁（307-311頁）および，久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』補注(105)（275-276頁)。

(32) 三木紀人全訳注『今物語』109頁。

(33) 三木紀人全訳注『今物語』115-116頁。

(34) ただし，あくまでそれはお互いが同じレベルの素養を持っている際にのみ通用するのである。このミスマッチから生じた気の毒な話として，第十八話（西行の受難）では，西行法師がせっかく優れた「うたごころ」を示しても，聞き手がそれを理解する能力のない者（この場合は主人の留守番をしていた侍）であれば，西行が平手打ちを食らったように，かえって災難をまねくこともあったようだ（三木紀人全訳注『今物語』121-122頁)。

(35) この歌の大意は「花が散るのもついらし，花の散り敷く庭を掃くのもつらいのです。花に物思いをする春の殿守はつらいものですね」。「とのもり（殿守)」は，庭の掃除などをする宮中の下級役人。この歌は『拾遺集』1055の源公忠が宮中の庭に散り敷く桜を惜しんで詠んだ「とのもりのともものみやつこ心あらば　この春ばかりあさぎよめ（朝の掃除）すな」に依ったもの（三木紀人全訳注『今物語』295頁，久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』補注(99)（274頁)。しかし歌心を持たない執行には理解されなかったようだ。

(36) 三木紀人全訳注『今物語』291-292頁。

(37) 「ははがつび」は「母がつび（女性性器)」で親を辱める詈言（久保田淳等校注『中世の文学　今物語・隆房集・東斎随筆』補注(101)，274-275頁)。

(38) 僧侶が歌を詠むことは，戒律に文字どおりに従えば，狂言奇語をあやつるものとして，否定的に見られるのだが，例えば，第三十八話（源氏供養）では，狂言綺語をあやつって人の心を惑わした罪で地獄の責め苦を受けている紫式部の霊があらわれ，自分が成仏できるために，源氏物語の各巻の名に「南無阿弥陀仏」を読み込んで欲しいと懇願する話である。能の定番である源氏供養では，安居院法印（聖覚法印，またはその父の澄憲か）の前に現れたとされる。しかし，本話では「南無阿弥陀仏」が読み込まれているとはいえ，和歌を詠むことによって成仏

する道がしめされていることは，非常に興味深い（三木紀人全訳注『今物語』252頁）。

⑶⑼　信実は，歌を詠む僧侶だけでなく，大衆にわかりやすい話芸を通して法を説くことを生業とした説経師を取りあげた話も記している。『今物語』では，第五十話（弘誓坊），第五十一話（説経と屁），第五十二話（はこの不始末）と続けて説教師の話が続く（三木紀人全訳注『今物語』321-331頁）。これらは，あまり上品な説話でないので詳しく解説することはしないが，第五十話の弘誓坊のような借金まみれの説経僧（名前からすると浄土念仏系の僧侶であろう）が歌で言い訳をする様子や，第五十一話の，説経中に聞こえた放屁の音も即興で法話に取り入れる才能のある説経僧の話からは，当時，仏道と世間道との間に立って，聖と俗をつなぐ重要な役割をこの説経師と呼ばれる僧侶たちが担っていたことも知られる。ただし，第五十二話のように，布施という欲にかられて，高座で粗相をしでかすというあわれな姿も描かれている。このような滑稽な話が記録されるほど，都の説経師たちの活動が盛んであり，中世仏教の普及と大衆化をもたらした一つの原動力であったようだ。しかし，その一方で仏道と世間道とのバランスをとることは難しかったようであり，『今物語』で語られる説経師の姿からすると，歌を詠む僧侶と比較してではあるが，それは文人貴族の信実の目にはあまり好ましい僧侶であるとは写っていなかったようである。

キーワード　藤原信実　『今物語』　和歌物語　法然門流　親鸞